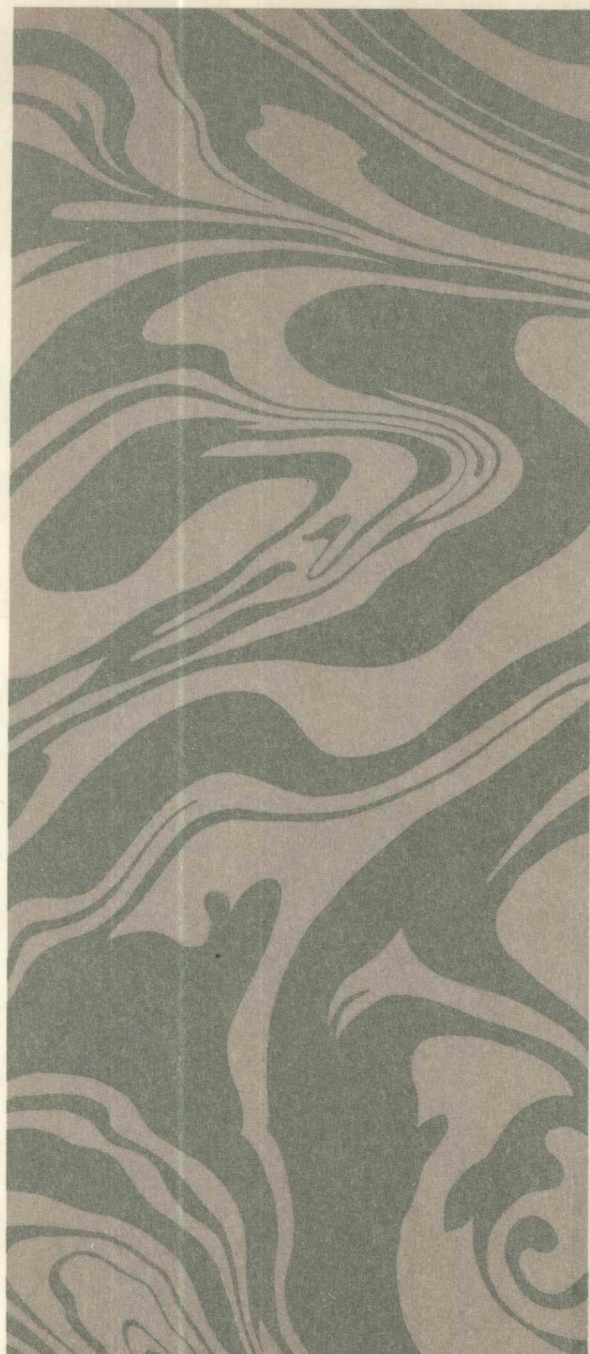


大野 晋

— 古典を読む —

14

源氏物語



古典を読む
— 14

氏物語
大野
晋

岩波書店

大野 晋

1919年東京に生まれる

国語学者

『日本語をさかのぼる』『日本語の文法を考える』(以上, 岩波新書), 『萬葉集(共著)』『日本書紀(共著)』『仮名遣と上代語』『岩波古語辞典(共編)』(以上, 岩波書店)ほか

源氏物語

1984年5月21日 第1刷発行 ©

1984年8月20日 第2刷発行

定価 2200円

著 者 おお大 の野 すすむ晋
発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発 行 所 株式岩 波 書 店
電話 03-265-4111
振替東京 6-26240

印刷・精興社 製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

目 次

一	はじめに——何を読むか	三
二	まずは平安時代の婚姻について	九
三	桐壺卷の位置——物語の設定	三
四	桐壺卷と帚木卷は連続しない	三
	(一) 『源氏物語』を解く手懸り	三
	(二) 成立論の展開	四
	(三) 反論の解消	五
五	①系の物語	六
	(一) ①系の仕組み——紫式部の漢学	六
	(二) ①系は「致富譚」である	六
	(三) 『源氏物語』の表現	六

(四) ㊸系の表現	一〇九
六 ㊹系の物語	一一五
(一) ㊹系は「失敗に終る挿話」である	一一五
(二) ㊹系の表現	一一九
七 紫式部の生活	一二七
(一) 『紫式部集』から見る	一二七
(二) 大臣家と女房と	一八七
(三) 『紫式部日記』から見る	二二五
(1) 断片	(二三五)
(2) 感想の部	(二三三)
(3) 日録の部の基本的問題	(二四三)
(4) 日録の部の分析——陽と陰	(二五三)
(5) 岐れ目の出来事	(二七九)
(6) 作品としての『紫式部日記』	(二九六)

八 ㉔ の物語 …………… 三〇五

(一) 執筆の時期 …………… 三〇五

(二) 年代記の完結 …………… 三三三

(三) 一対二の関係 …………… 三二一

九 ㉕ の物語 …………… 三三九

(一) 再び『源氏物語』の表現について …………… 三三九

(二) 作者は何を語ろうとしたのか …………… 三三三

注 …………… 三九九

あとがき …………… 四〇三

源氏物語

一 はじめに——何を読むか

物語や小説はどう読まなくてはいけないということはない。読み手が好きに読んで楽しむばそれでよいものだと思う。だが作者は一体この作品で何を言いたかったのか。この作品をどうして書く気になったのか。そんなことを読み手が問題にし始めると、それを考えるにはいくつかの手続きを踏まなくてはならなくなってくる。作品が古い時代のものであれば、今読んでいる本文は正しいものか、言葉の意味は当時の意味をちがえずに理解できているのかなどがすぐ問題になるだろう。読み手は作品をただ味わうだけでなく、内容を分析して問題の正しい答えに近づこうとする。それには、時の距りによって分らなくなっているその時代の生活の習慣や、社会の組織の今日との相違を心得ておくことも必要になる。

平安時代の物語の中で、『源氏物語』ほど精密な言葉づかいで書かれた作品は他にはない。その言葉づかいのこまやかさが分るようになれば『源氏物語』は面白さがさらに深まって

くる。一見何でもないように見える表現の薄衣うすぎぬを通して、実は明確な像を作者が透かし彫りにしていることが読み取れるようになればなるほど、『源氏物語』は魅力をましてくる。個々の単語は、ほのかな香り、かすかな陰翳をたたえて使われている。作者紫式部は日本語について用意が広く、深く、鋭敏である。与謝野晶子、谷崎潤一郎、円地文子というすぐれた歌人や小説家が何年にもわたってこれの現代語訳に没入して来たのは、そうした歌人や小説家の鋭い日本語感覚からしても、あえかで、しなやかで、かつ緻密、的確な原作の表現に、飽かず引きつけられるものがあるからだろうと思う。

私は古典語学にたずさわるもののはしくれとして、この作品のこころを汲むに役立つと思われる言葉の解釈を、いくつか提出してみたいと思う。また、この作品の内容をどう理解するかについて、少しばかり述べてみたい。

最初にも書いたように、物語や小説はどのように読まなくてはいけないということはないものである。『源氏物語』も同じである。この五十四巻の物語は、その一つ一つがどの巻でもそれぞれに面白い。全部を通読するのではなく所々を読んで味わうこともできる。ことに初めの方の②帚木、③空蟬、④夕顔(②③④は現在の巻の順序を示す。以下同じ)などは短篇仕立てで、どの巻も面白い。だから気に入った所を読むのも一つの読み方である。

また『源氏物語』は①桐壺から始まり④夢の浮橋で終わる長編の物語でもあるから、巻を追って読み進めばそこに事柄として何が書かれているかということとは勿論分るはずである。

しかし『源氏物語』については他の作品と少し事情の異なるところがある。というのは『源氏物語』は全五十四巻のうち、はじめ三十三巻までは現在並べられている順序で書かれたものではない。三十三巻までは④系と⑤系という二つの系列に分離される。④系に属する十七巻が最初に書かれ、③藤裏葉ふぢのうらはで話は一度完結した。その後で⑥系十六巻が順次書き足されて、④系の中に点々と挿み込まれた。その結果が現在の順序である。その後で④系の人物と⑤系の人物とを総合的に登場させて④若菜巻以降が書き継がれ、全五十四巻の『源氏物語』が成立した。この見解は戦後になって明確な結論として提出されたものであるが、私はこの見解に賛成なのである。そしてこの見解を認めた上で『源氏物語』を読むことが必要だと考えている。

単に制作の順序として④系十七巻が先に書かれ⑤系十六巻が後で書かれたことが判明したということならば、それは大して意味を持たない。現代の映画の制作では最後のシーンを最初に撮影するというようなことは日常茶飯事で、制作の順序は作品として意味を持たない。ところがこの④系と⑤系とでは作品を造形する手法が違う。扱う主題が違う。推測

すれば作者の想定した読者層も異なっている。①系は②系とは異質で、極端な言い方をすれば別の作品だと言ってもよい。そうした異質の①系が②系のところどころに追加され、挿み込まれたのであるとすれば、これは『源氏物語』全体を一つの作品として理解する上で重要な視点を提供すると私は思う。だからその研究を私は本書で紹介したい。

実はこの読み方は、平安・鎌倉・室町の各時代を通じて、江戸時代の初期までは『源氏物語』の構造の理解の仕方としておよそ伝承されて来たらしいものである。ところが江戸時代の国学者の『源氏物語』研究以後、それは分らなくされてしまった。

私は本書で、もう一つのことを扱いたいと考えている。それは『紫式部日記』のことである。紫式部は、作品として『源氏物語』の他に『紫式部集』という歌集と『紫式部日記』とを残している。『源氏物語』は物語でありフィクションである。その仮構の中に作者が表現した真実をいかに読むかが読み手の一つの興味である。それと同時に、彼女の残した歌集や日記からわれわれは何を読み取ることができるか。それが物語の理解とどうかかわるのか。それについて私の考える所を書いてみたい。

「日記」は当然「事実」にしっかりと足を突っ込んで書かれるはずである。しかし全面的に事実が書かれた回想録などはありうべくもない。片足は事実に突っ込んでいても、い

ま一つの足は挙げたまま踏み出されずにあたり、時にはあらぬ方向に踏み込んだかのようを書いてあたりする。その実と虚との間を読み取ることはつまり作者の生を読むことである。作者の喜びや苦しみや祈りあるいは転機がその記述を通して、また記述の無いことを通して目に見えることがある。私は『紫式部日記』について私なりの読み方を少しばかり書いてみたい。『紫式部日記』と『源氏物語』とを混線させてはいけないというのは一つの常識であると思う。しかし私は、『源氏物語』を理解する上でも『紫式部日記』は大なる役割を果すと思っている。

作品を読む人は原文に即して原文を忠実に読まなくてはならない。しかも読み手はそこから想いをはばたかせ自由に心を飛翔させる。作品をめぐっての遊あそびを樂しむことこそ文芸作品を読む最も基本的な悦樂である。私は『紫式部日記』と『源氏物語』とをめぐって私の飛翔をこころみたい。

こうして私は『源氏物語』のことばを読む、筋によって中味を読む、また作者自身を読むという三つのことをしてみるつもりでいるのだが、『源氏物語』の時代には現代と異なる生活があり、慣習があり、また社会の組織もあった。それを心得ないと『源氏物語』は全く間違つて受け取られる。そこで今日の若い読者、また、この物語にも平安時代にもまだ

あまり親しんでいない読者のために、いくつかの解説的な文章を加える必要を私は感じる。たとえば当時の婚姻の慣習とか、当時の学問の実際とか、あるいは大臣家と下級貴族の生活程度の相違とか、宮廷や貴族に仕えていた「女房」なる女性たちの生活の実態などについてである。これを知らない『源氏物語』の基本的なありようが分らなくなる。そこでそれらについて初步的なことを、その場その場にに応じて多少書き加えるつもりである。これは平安時代の文学に馴染んでいる人々にとっては常識にすぎず、改めて読まされることはいは苦痛だろうと思う。しかし、何も知らずに『源氏物語』に近づこうとする人もある。その人々のための文章として寛大に見すごして頂きたいのである。

一一 まずは平安時代の婚姻について

何と言っても『源氏物語』は男と女との間に生じるさまざまの事件を扱う作品である。こうした男と女の間の上出来事は、結婚の仕方についてのその時代その社会での慣習あるいは倫理によって位置づけられ、意味づけされることが多い。従って私はまず当時の結婚の風習一般について説明しておきたい。

全体的に言えば婚姻についての日本の慣習は、奈良時代から少しずつ変化して、現代に至るまでの間にかなり大きい変化を経ている。だから、奈良・平安時代の婚姻については一夫一婦制だけを正しいとする眼で見ると間違った判断に陥ることが少なくない。大づかみに言えば、奈良時代には「妻問い婚」、平安時代には「婿取り婚」、鎌倉時代を経て室町時代に至って「嫁取り婚」が行われたと言^注ってよいだろう。

『万葉集』を見ると、しきりに「妻問ふ」という言葉が出てくる。「妻問ふ」とは夜になってから女の家を訪問し、そこに泊まり、翌朝暗いうちに起きて女と別れ、自分の家に

帰るといふ結婚の仕方である。奈良時代には男が道で女に会ったり、人の集まる市いちで女を見かけたりして気に入ると、女に「家は何処」「あなたの名は何」と尋ねる。名を聞くのは女に姉妹がある場合があるから間違えないようにとの配慮である。家の在処ありかと名を聞くのが求婚のしるしである。女はその男が気に入れば自分の家の在処と自分の名とを男に教える。男はそれを頼りに夜になってからその女の家を訪れ、外から女の名を呼ぶ。家の外で歌を歌ったりする。予告なしに家の外から中の女に呼びかける男もある。そういう場合に、気が進めば女は男を自分の家に招き入れる。

男は昼間は自分の生まれた家の労働に従事しており、女もまた自分の家の田畠の労働や洗濯・水汲みなどの仕事に従事する。そして夜になって男は女を訪問する。奈良時代やそれ以前の例では、結婚すると「主屋おもや」の傍に「端屋つまや」を建てて、そこで男を迎えたようだ。男はそこに同居するのではなく、夜来て朝帰る。つまり通い婚である。子供が生まれれば、それは「主屋」を中心とするその一族の子供として一族が力を貸して育てる。父親は通って来るだけである。当時は女は女で土地を分け与えられ、それを自分の財産として持っていた。また、娘は住む家を女親から継承する。このように女は自分なりの財産があり、それによって生活していたので、通って来る夫に経済的に依存して生きていたわけだ。